新しい英語指導助手ハナさん着任

▲授業のようす

教育のページ

8月2日から、英語指導助手としてハナ・サンプターさん（イギリス出身）が着任しました。

ハナさんは、中学校の英語の授業だけでなく、小学校や幼稚園、高校での英語指導と、一般の方を対象とした英会話教室の講師を勤めていただきます。

8月27日には、中学校でハナさんの初めての授業が行われました。ハナさんは、「出身地」や「家族」、「趣味」、「好きな食べ物」といった生徒たちの質問に、写真や道具を使って答えていました。

Hello!
My name is Hannah Sumpter. I am from Sussex, in England. I'm 22 years old. I graduated from University in July.
I am looking forward to living in litate. It is beautiful. The people here are very friendly and helpful.
I am looking forward to learning taiko and calligraphy whilst in Japan.
My Japanese is poor, but I will try hard to learn it.
I look forward to meeting you.

（日本語対訳）
こんにちは。
わたしは、ハナ・サンプターです。イギリスのサセックスから来ました。
22歳です。七月に大学を卒業しました。
いいたての生活を楽しみにしています。
いいたては美しい。人はとても親切です。
日本の太鼓と習字をやりたいと思います。日本語はまだ下手ですが、がんばります。よろしくお願いします。

子育て相談室　－ お気軽にご相談ください －

父親力　その4

現代は、父親力が失権している社会といわれています。父親が、強制力、交際力、躾力などとともに、家族を統合する役割を十分に果たさないことから、子どもはものごとの判断の基準、行動の原理、他者を思いやる心情を身につける機会を失っています。その結果、身勝手で利己的な言動、人間関係を深めるのが困難、いじめや万引きなどの反社会的な行動、無気力など、生きる方向を見失った子どもたちが増えつつあるように思います。

父親力の復権が望まれます。それは、かつて一部にあったような家族に独善的に君臨する父親ではなく、ごく自然な権威を持つ父親の再登場です。適切なものの考え方を表現する、社会のルールや道徳を教える、人のつきあい方を身をもって示す、衣食住での価値判断を明確にする、家族を一つに統合するなど、父親が権威を持って語り行動することで、子どもたちは心豊にたくましく育っていくに違いありません。

私は、折々に出会う飯舘村の父親の皆様方の父親力に敬服しています。父親の皆様方、ますます子どもたちの心身の健やかな成長のために力を尽くしてください。

飯舘中学校スクールカウンセラー
海野　和夫
財団法人国民保健会主任研究員
学校心理士・家族心理士
臨床心理士

○教育相談は飯舘中学校（☎４２－０００８）へ電話でお申込みください。

沖縄でのまでいの旅 見聞録「いのち」

６月27日～30日までの３日間、村内の小学６年生が参加して行われた「沖縄でのまでいの旅」。参加した子どもたちは何を感じ、何を学んできたのでしょうか。

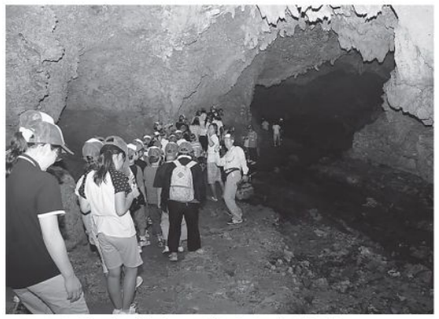
今月号から４回にわたりテーマ別に参加した子どもたちの感想をお届けします。

飯樋小　只野　葵

二十八日の交流会で、沖縄の小学生や高校生の元気の良さや、あいさつのしかたがすごく良くて、沖縄の人たちはすごいんだなあと思いました。

あと、三日目のチビチリガマとシムクガマを見に行った時、チビチリガマでは、たくさんの人が自決や子どもを殺して自分も死んでしまったということを聞いて、私だったらそんなことできるかなあと思いました。シムクガマでは、ガマの中にいた人全員が、ハワイ帰りの人の言う事を聞いて助かったのに、なんでチビチリガマには、そういう人がいなかったのかなあと疑問に思いました。

２つのガマの中で話を聞いて、改めて命の大切さを知りました。これからも、自分の命は自分で守り、他の人の命も大切にして、これからもずっと、命を大切にしていきたいと思いました。あと、私が大人になっても戦争のない、いい村でいられるようにがんばっていきたいです。



▲シムクガマを研修する子どもたち（読谷村）

草野小　山田　高帆

私が沖縄でのまでいの旅で一番心に残ったことは、チビチリガマ、シムクガマの見学です。戦争で自決した人たちがたくさん集まっていた所です。私は実際その場にいたわけではないので、戦争の恐ろしさや悲しさなどはわかりません。でも集団自決はきっととても苦しいんだ、ということはなんとなくわかります。

どんな気持ちで亡くなっていったのか、家族や子どもを殺すことがどれだけ辛かったか、そんなことがわかった見学でした。もう戦争という言葉がこの世からなくなるように信じています。

そしてもう一つ心に残ったことが、ひめゆり平和祈念資料館、ひめゆりの塔です。女の人が戦争に行ってけがの手当をしなくてはいけないということを学習しました。その戦争にいく人が師範学校女子部約三百名と第一高等女子高約八百名が沖縄県各地から集まったそうです。戦争中は、みんなレブリカとよばれる手紙で家族と連絡をとっていたそうです。たとえ戦争で戦うわけではないとしても、目の前でけがをしたりする人たちを見て、とても怖かったと思います。

これからは、そんな恐ろしいことがないようにしたいと思います。

▲沖縄陸軍病院第三外科壕跡

◀沖縄陸軍病院第三外科壕跡前で戦没者の冥福を祈る子どもたち（糸満市）